

# 日本における『ふしぎの国のアリス』 の初期翻訳

石川 春江



愛ちゃんの  
夢物語

ルイス・キャロルの『ふしぎの国のアリス』は1865年、『鏡の国のアリス』は1872年に出版された。

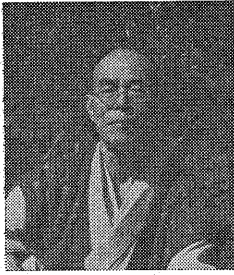
日本での翻訳は『鏡の国のアリス』の方が早いらしく、私の気付いたものでは「鏡世界」の題で『少年世界』5巻9号(明治32年4月15日)から、5巻26号(明治32年12月15日)まで8回にわたって(「ライオンと一角獣」まで)長谷川天溪が訳している。『ふしぎの国のアリス』は『少女の友』創刊号(明治41年2月)から1巻3号にかけて、永代静雄が須磨子の名でのせている。これは話の発端から「女王のクローカー・グラウンド」「ニセ海ガメのものがたり」「エビのカドリール」などをとびとびに訳したもので、1巻4号以下2巻4号(明

治42年3月)まで10回話はずづくが、これは主人公の名はアリスでも内容は永代静雄の創作である。これは後に単行本として『アリス物語』(永代静雄 紅葉堂書店 大正元年)として出版された。それ以前に単行本として『愛ちゃんの夢物語』(丸山英観 内外出版協会 明治43年)『お正月お伽斬』(うさぎ山人編 スミヤ書店 明治43年)がある。

これらの訳はすべてジョン・テニエルの挿絵のある原本を見たらしく、『少年世界』『少女の友』『愛ちゃんの夢物語』も挿絵にテニエルを模したものを使用しており、『お正月お伽斬』の表紙には手に時計を持った兎が描かれている。物語の内容はむろんのこと、精密でありながら奇想天外なその挿絵に強くひきつけられたのであろう。

訳は『お正月お伽斬』は『ふしぎの国のアリス』の大体のすじをおってはいが、訳者独自の文章のつけ加えが多く、『アリス物語』も同様装飾的な文章、独自の翻案の上に後半は作者の創作である。この中では『愛ちゃんの夢物語』が最も忠実な訳をしているといえよう。

この『愛ちゃんの夢物語』はNHKの「ホントにホント」に国立国会図書館の所蔵本として紹介されたということで、訳者丸山英観の娘さんから図書館あてに手紙を



丸山英観

いただいた。

それによると、丸山英観は明治18年1月18日横須賀に生れ、東京芝二本榎にあった檀林（寺の子弟を養成する機関）で学んだ後、麻布中学に進み、四修で早稲田の英文科に入り明治41年卒業、一時黒岩涙香の『万潮報』に勤め、すすめられるままにいろいろの翻訳をしたという。もともと寺の息子であったため山梨県立女学校の英語教師を経て横須賀堀の内の日蓮宗泉福寺の住職となり、昭和31年2月5日、72才でなくなったとのことである。

明治期の文学の翻訳は、いわゆる著名な文学者の手によるものばかりでなく、時と

しては専門外の人々の訳もあり、訳者がどのような人であるのか、しらべるのに困難な場合が多々ある。これはテレビに出たために訳者の経歴が明かになったもので、児童文学をしらべる者にとっては思いがけない幸であった。

ところで『お正月お伽噺』の訳者、うさぎ山人は本名その他まったく手がかりが得られないが、長谷川天溪、永代静雄、丸山英観の三人はともに早稲田大学文科の出身者である。『アリス物語』の永代静雄はそのまえがきで「早稲田大学教授内ヶ崎愛天〔作三郎〕先生から、キャロルの『アリスの奇界探検』という本を拝借して読んで非常に面白かった」とかいている。ここに紹介したアリスの初期の訳は、この辺に種があるものであろうか。なお『鏡の国のアリス』の明治期の訳は、先にあげた『少年世界』に掲載されたもの他には見当たらなかった。

(いしかわ・はるえ)

訂正

参考書誌研究20号分

- p. 7 右 「遊記類纂」 2行目・来→徠
- p. 26 右 「浴陸奥温泉記」 2行目・水→泉
- p. 34 左 「山吹日記」全記載を下野国「二荒廼山裏」の後に移す。
- p. 46 右 「登立山記」ルビの部分・てた→たて